

「奥州道中記」

— 翻刻と解題 —

山本和明

はじめに

本学図書館に所蔵される『奥州道中記』は、平成七年に新たに「春曙文庫」に収蔵された写本で、相愛にゆかりある田中重太郎旧蔵本である。五二丁表までは、仙台の地から江戸への旅程のなかで「道すがらの名所旧跡」について触れつつ、道程や駄賃を記録している旅行記である。五二丁裏からの「仙台領分名所旧跡」や「古城之覚」などは、前半部の補足といった趣がある。「旅行の眠をさますすがにもと、此はたとせあまり、のぼり下のとまりく、又は茶店の老夫或はさかき馬奴などに尋問しこと共を、今爰にかきあつむ」と序文に記す如く、その土地土地の様子を、旅人の目線で、どこに何が所在するか詳述されている。

著者は未詳ながら、序文より「世につかふる身」として「はたとせあまり」の往来の中で記されたものとし、また「伊達政宗卿〔19ウ〕という表現や仙台領の名所旧跡に詳しいところからみて、伊達家に仕える者としてよいのではないか。援用書目として、歌書をはじめ、「東鑑」「日本神社考（註―本朝神社考）」「太平記」「江戸道中記」「宗久か記（註―都のつと）」「元享釈書」などが用いられているなど、相應の知識人であったようである。五二丁表には筆者自らの歌二首が採録されている。

「又此道の記予がいまだ清書せざる以前、いつの頃歟、江戸神明前の書林何某、縁をもとめ龜書を写とり是を板行して世に広むるに」〔2オ〕という序文に従えば、本書は既に板行に掛かっているということになるのだが、残念ながら管見に及んでいない。ただ、板行されたものが見いだせたとしても、それに誤りが多いことも序中の発言にあるため、翻刻に付す価値はなにがしかあるものと思われる。

本書そのものの書写された年代は、印象としてはあるが、江戸中期とすべきであろう。ただ、本文の内容中、原本の成立時期を

同わせる記述を確認できる。

- ① 実方雀といふとなり長徳元年より元禄七年まで七百年になる実方墓に冬枯の薄物悲しけなる〔6ウ〕
 - ② 正治二年十月十四日合戦して攻落しぬ元禄七年迄四百九十五年に成〔13ウ〕
 - ③ 元弘元年より元禄七年迄は三百六拾三年になる寛永元年の頃此山もゑて鳴事年を越てやます其灰遠くとんて草木の葉を埋む又其後寛文十年の春の頃灰のふる事あり当春も灰のふりたる事ありし也又忘れすの山といふ名所も是なり〔15ウ〕16才〕
 - ④ 文治五年より元禄七年迄五百六年になる是より海道東路なり〔18ウ〕
 - ⑤ 勝道上人の日光山へ初て登り給ふ神護景雲元年より元禄七年迄九百式十八年なり〔40ウ〕
 - ⑥ 治承五年より元禄七年迄は五百十三年に成〔44才〕
 - ⑦ 大同元年より元禄七年まで八百五十六年に成〔57ウ〕58才〕
 - ⑧ 天平宝宇六年より元禄七年まで九百三十三年に成〔61才〕
 - ⑨ 源頼義征伐ノ始天喜五年ヨリ元禄七年迄六百三十八年二成〔84ウ〕
 - ⑩ 延暦二十歳二建立ト王代記ニ見エタリ元禄七年迄八百九十四年二成〔85才〕
- 以上の例にみるように全て「元禄七年」が起点となっている。このことから本書原本の成立は元禄七年を考えて良いのではないだろうか。文中傍記される御領などの記述についても、堀田正伸が福島へ貞享三年入封、元禄十三年出羽山形に移封。また奥平昌章が貞享二年宇都宮へ入封。元禄十年には昌成が、丹後宮津へ移封していることを考えてみても、おおむね年代に合致している。
- また68ウに法眼猪苗代兼寿の歳旦が紹介されているが、兼寿は隣松軒と号す伊達家ゆかりの連歌作者で、元禄七年五月十八日に没している。その兼寿を「近來」法眼と紹介していることも、本書成立時期を示す傍証となろう。
- すなわち「奥州道中記」は、元禄七年当時の奥州から江戸への旅程を示してくれている訳で、元禄時代のことを同う恰好の資料ということになる。

本書には名所旧跡に関して和歌を引き、故事をひくなどしてかなり詳細に記載されており、古き名称を知るに貴重である。例えば

「山下に禪寺ありて末松山と額を打。又此所に奥の細道とてむかしの海道あり」〔62ウ〕という表現もみえるが、「奥の細道」とは「むかしの海道」であるというのである。また珍重すべきは駄賃を記録している点であろう。その意味で、芭蕉「おくのほそ道」解読のための参考資料としての意義はあると思う。

書誌・凡例

- 所蔵 相愛大学・相愛女子短期大学図書館
- 整理番号 二九一・二二〇（春一〇三二）
- 表紙 原表紙枯色無地。
- 外題 表紙左肩。「奥州道中記」と直墨書。
- 書型 大本一冊。縦二七・〇糎×横一七・四糎
- 装幀 四つ目、袋綴。
- 丁数 墨付八七丁・遊紙前一丁。
- 行数 序文本文ともに七行。
- その他 帙あり（田中重太郎題簽書）。
- 翻刻凡例
 - ・本文は相愛本通りとしたが、漢字は任意に通行の字体に改めた。
 - ・清濁、句読点は、相愛本通りとし、新たに付さなかつた。
 - ・読み仮名も相愛本にあるもののみをすべてつけた。
 - ・丁移りは〔○オ〕〔○ウ〕の形で示した。
 - ・割注等はへゝ内に示した。左傍記は一部（ ）で示した。

・引用和歌は上句と下句で改行され二行となっているが、一行に改めた。

・図版位置は「」で示した。

※本書の翻刻を許可していただいた相愛大学相愛女子短期大学図書館に深謝申し上げます。また清濁・句読点を付し、解釈を示すべきであったが、急遽原稿を作成したためそれに至らなかつた。ご寛恕いただきたい。

夫世につかふる身は心にいとまなく勤のせつなるか中にも思ひかけさる旅の首途宮城野の萩の下しきおき出て見ぬ行ききは覺束なき道芝毎に直まよふ露のよすかもしら雲の果しも遠き武蔵野の月の行衛は何処そとうゐたつ旅のものうさ我身ひとつにおもはれ道すからの名所旧跡もしる事更に嵐の音すへ白川の関もとめねは戸さ、ぬ御代とは云なからさすかならぬ旅の道心細き折からの身なり誰も初て〔1オ〕旅衣うらふる、身のわひしさは嘸とおしはかり身にくらへこしよの人の便りにもなりなは旅行の眠をさますよすかにもと此はたとせあまりのほり下のとまりく又は茶店の老夫或はさかしき馬奴などに尋問しこと共を今爰にかきあつむされは此道の記いにしへよりなきにしもあらねと其ことの葉の色かも薄くあら磯のなみの藻屑のよるへも遠く書置道の敷嶋の言の葉をくわへて増補す寔に愚なる心の奥よりの道の記踏ま〔1ウ〕よひたる所は後説の増減を願ふ物なり又此道の記予かいま清書せざる以前いつの頃歟江戸神明前の書林何某縁をもとめて龜書を写とり是を板行して世に広むるに順逆のわかちもなく左の事は右となり右は左のたかいあり願くは今此清書を以あらため直さん事を思ふかならずしも武蔵鐙のほり下りの人々是を右の書林につたへて末の代のたわれ草となしなんことを願のみ〔2オ〕

一 北目町

一里

駄賃三十拾文

此間に仙台川なかる、是を広瀬川と云東鑑に名取広瀬の両川に大つなを引て柵とし秦衡アキコウは奥の方国分原鞭楯ムチヅクに陣すとあり

一 長町

一里

駄賃三十拾文

此間町を出て筑川ツクガハと云あり新田町は又中田へ行詰て名取川なかる、名所にして諸集にあまた読り中にも〔2ウ〕

古今集

忠岑

陸奥にありと云なり名取川なき名取てはくるしかりけり

続後撰集

定家卿

六

名取川はるの日数はあらわれてはなにそしつむ瀬々の埋木

此川の埋木を香炉の灰に用る事も吹草名物にみへ〔3才〕たり故に今以禁中或は御撰家方諸公家衆御所望たひくにおよひ又源頼朝卿泰衡征伐の時此川にて

我ひとり今日の軍に名取川

と説たまひし時梶原源太景季

君もろともにかち渡りせん

一 中田 三拾一町拾四間 駄賃貳拾六文

駅家を過て前田橋と云を渡り道より二町余西の方に〔3ウ〕農家みゆる爰に義氏の配所と云伝へし所あり世に義氏といふ草紙あり是には奥州名とらの里とあり名とりと書違ひたるか但取の字かなの読くせにてとりとらの違ひ歟又最上白岩の郷に名とらのさととて爰にも義氏の配所といふ所あり出羽陸奥一国の時の事にはあらし奥州名取とあれは中田を突といふへきか又是より西に雁の宮とて名取の老女〔4才〕と云伝しかんなきの旧跡あり此老女熊野三山の神を名取郡に勧請す今の熊野三所是なり牛王といふ謡などにも作れり東鑑に名取の郡司熊野の別当か事有泰衡か後見として一方の大將たりしか文治五年九月十八日かう人として上総助義兼これを召進す此熊野宮の祭礼は九月九日なり

一 増田 一里三拾五町 駄賃五拾四文〔4ウ〕

此間に植松といふ所あり爰に花輪のまつとて名木有藤原の元良植初しといふ

藻塩草

武隈の花輪にたてる松たにもわかことひとりありとこそ聞

此間右松のほとりより一里余西の山際に笠嶋村といふ有爰に道祖神の社あり傍に実方中将の塚有又社の前に〔5才〕馬塚あり実方の乗る馬を埋し塚なり一条院の御宇に中将実方不敬の罪ありて奥州へ敵せられ侍る有時馬に乗て此社の前を過る有人いふ是は奥州名取郡笠嶋村の道祖神なり行人かならず馬よりおる、実方問何の神そや答て曰王城賀茂川の西一条の北出雲路の道祖神の娘なり密に商人に通るを以放逐せられて爰に來れり国人参り拜す祈る者は陰相を作り神前〔5ウ〕に直れはかならず靈驗有今中将の婦洛をいれ実方の云しからは是下品の女神なり我なんぞ馬よりおりんやとて徑に行所に実方の馬にはかにたをれて死す実方も死す因て社の傍に葬るその靈化して雀と成て王城に飛來り内裏の殿上台盤所に入て飲啄飛鳴すと日本神社考に記せり又哥人のつたへにいふ正四位下右中将藤原実方朝臣後に陸奥守に任す貞信公の〔6才〕日比孫なり父は定暉母は右大臣定方の娘なり殿上にして行成卿と口論し笏にて行成の冠を打落したるを主上密に御覽し実方をは哥枕みてまいれとて陸奥守なしてつかはされ終に此国にて長徳年中に卒す其後殿上の台盤のあたりにかならず雀あり是を実方雀といふとなり長徳元年より元禄七年まで七百年になる実方の墓に冬枯の薄物悲しけなる〔6ウ〕を見て

西行法師

朽もせぬその名はかりをとめおきて枯野の薄かたみにそなる

宿を出て橋有此間に飯塚堀内植松新田町あり

一 岩沼 一里式拾七町 駄賃五拾式文

武隈の館は町の西裏なりいにしへ陸奥ノ守たる人の〔7才〕数多住せる所なり二本の松とて名木あり此松は藤原の元良か住ける館の前に初て植しなり此人二度陸奥守と成しに後の度読り

後撰集 藤原元良

うへし時契りやしけん武隈のまつを二度相みつるかな

此集の詞書をみればいにしへよりありし松の枯しを〔7ウ〕みて元良植しとなり此松又野火に焼しを源満中植次其後うする橘の道具植る其後源孝義是を切て橋を作るうたてしき人と名所和哥の註に記せり其後能因法師二廻陸奥へくたりけるに後の度松なかりければ

後拾遺集 能因法師

武隈のまつはこの度あともなし〔8オ〕千とせをへてや我はきつらむ

此外諸集に数多の哥有二木の松武隈明神の北の方にあり又此社は稲荷大明神なり二月初の午の日祭る社のうしろに岩穴あり穴宝山と号す逢隈川も爰をなかるゝ東関より東奥へ下るには白川にて此川を渡り夫より駅路の右の辺に見へかくれて岩沼より東海へ入岩沼の下に荒濱〔8ウ〕蒲崎とて村あり南はあらはま巨理郡北は蒲崎名取郡なり阿武隈とも書陸奥の国司にてまかりけるととき高階統重朝臣範永朝臣の本へつかはしける

高階統重朝臣

行すゑに阿武隈川のなかりせはいかにかせましけふのわかれを〔9オ〕

返し 藤原範永朝臣

君にまた逢隈川をまつへきに残りすくなき我そかなしき

此川下に加嶋といふ所有玉葉集に源順か哥有又此間西の山際をみれば東平王の塚とて松数多塚の上に生たるあり宗久か記に阿武隈川の渡し船より下て行道辺に一の塚有行来の人の仕〔9ウ〕わざと覚へてあたりの木に詩哥などあまた書付たりむかし東平王と云し唐人の塚なり古郷を忍つゝ爰にて身まかりけるか其のおもひのすへにや塚の上の草木も皆西へ傾くと申ならはせりいとあはれに覚へて彼照君の松塚も理りとそ思ひやられし誰も旅の空にてはかなく成なは夜半の煙もなを古郷の方にやなひかましとうき世の妄執を〔10オ〕あちきなくこそ覚へ侍りし塚の上に松の数多見ゆるうなひ松とは是にや駒の鬣のやうなりあはれ成物語のためしも思ひ出侍るむかしの道は西の山際に付て有又一説に此塚は弓削の道鏡の塚なりといふ彼道境孝謙天皇へ通ることを以此所へ配流爰にてむなく成る其塚なり共いへり彼塚より今の道へ出て程近き所に稲葉の渡りといふ名所ありと教へし人有巨理郡へ〔10ウ〕行道逢隈川の渡りなり或説に

稲葉の渡りは武隈の辺に有と記せり風をよくいなはの渡りと説る哥あり又東平王の塚の辺より上の山へ植つゝける松は薬師堂へのほる道の左右へ植し松なり是を千貫松といふ何故に名付しそと傍の人に尋しに俗に能事をは備千貫といえり然に東海の船人此松を目当にして方角をわきまふされは舟人の為〔11オ〕には備千貫成へしとなり又薬師堂より少し隔りし所に緑丸の石とて鳥の形成石あり此辺をむかし元男か嶋といへり百合若鷹の旧跡といふ尤いふかしやうけん寺と云寺あり鷹の硯の寺と書町より前に竹駒寺といふ真言宗の寺有武隈寺か又植松に愚禪寺といふ寺あり此間に長谷入間田など、云在家あり豊の表を所作とする〔11ウ〕所なり

一 槻ノ木 一里半 駄賃三拾八文

町に満蔵院といふ寺あり少出て八幡の社有八月十五日祭る此道阿武隈川の流に付て行此間に菟田といふ在所あり

一 舟迫 一里半 駄賃四拾文

町に東禪寺と云寺あり此間に小橋二つあり文治五年〔12オ〕八月十一日源頼朝卿此所に逗留爰に畠山重忠西木戸太郎国衡か首を晒す甚感悦なり和田義盛かいふ国衡は義盛か矢にあたる重忠か功にあらずと争ひの事あり同十二日山城の権守秀高か四男川村千鶴丸年十三にして一昨日の合戦に武勇のはたらき若少に似合さるのよし頼朝卿感悦の余り首服を加へて川村四郎秀清と名る加冠は加々美の次郎〔12ウ〕長清なり委く東鑑にあり又此間の路辺へ指掛りたる山あり此山に葦多くあれは山神の靈験成とて葦神山といふならはせり又此峯つゝきに輝井の太郎か石塔あり海道よりみゆる又葦神山の向ふ左の方に舟岡山みゆる是はいにしへ柴たの館なり源頼家柴田の次郎に尋とはるへき事有て度々召あれとも不参扱は逆心疑ふ所なしとて宮城四郎を指つかはし追討せらる〔13オ〕正治二年十月十四日合戦して攻落しぬ元禄七年迄四百九十五年に成舟迫大川原ともに柴田郡なり

一 大河原 三拾町 駄賃貳拾五文

此間土手道を行右の方三十余に木立見ゆる所に大高宮あり此神は用明天皇の御靈成といふ化して白き鳥と現す故に白鳥明神といふ文治五年八月十日阿津檉山の合戦破れて錦戸逃亡出羽路におもむく頼朝其跡を〔13ウ〕追ふ爰に和田義盛先陣に馳抜昏黒に及て彼大高宮の辺にいたる義盛名乗て追掛る宮の前の道田の畔より西木戸返し合せ義盛か矢に当り疵を痛引退く此時国衡馬を深田に打入上る事あたにすかゝる所に畠山か門客大串治郎等利を得て国衡を梟首すと云々国衡か馬を乗入し所とて大高宮の側に沼田あり彼馬は高館黒とて奥州第一の駿馬長九寸あり大肥満の錦〔14オ〕戸是に乗て毎日三ヶ度平泉の高山に登るに汗をも下さゝる馬なれとも此深田よりあかる事を得すとより夫よりして此沼を馬取沼と号す今のまとり沼是なり大高みや平村の内なり

一 金ヶ瀬 一里拾五町 駄賃四拾貳文

此間に宮の松原赤坂といふ所あり又松川といふ有此川常に濁りてなかる、なり是蔵王か嶽常に焼るゆへなり此故に〔14ウ〕魚不住

一 宮 一里三拾壹町 駄賃五拾貳文

此刈田の宮も白鳥明神也用明天皇の御后なりといふ刈田柴田両郡にて白鳥を恐敬する事甚し此間に土橋四つ皆小橋なり白石川二瀬にて渡る故に橋も二つに掛る町の入口を流る、川を子捨川といふ

一 白石 一里半 駄賃四拾三文〔15オ〕

是より西に蔵王か嶽見ゆる権現の社ある故に蔵王か嶽といふ宗久か記に逢隈川の渡し船に乗て水上遠く見渡せはかさなる山の上に煙の立のほる所ありしを舟子共に問しかは元弘のみたれに鎌倉のほろひしより此煙立はしめてより以来に今絶ぬ成とかたりしいと不思議なる事とも也元弘元年より元禄七年迄は三百六拾三年になる寛永元年の頃此山もゑて鳴事年を越てやます其灰遠くとんで草木の葉を埋む又其後〔15ウ〕寛文十年の春の頃灰のふる事あり当春も灰のふりたる事ありし也又忘れずの山といふ名所も是なり

陸奥の阿武隈川のあなたにそ人わすれすの山はさかしき

町出て右の方に浄蓮寺誓蓮寺用園寺關山寺千念寺伝福寺など、いふ寺あり是より海道山坂有白石紙とて紋松原等の名紙出る〔16才〕

一 無川

一里半

駄賃四拾七文

町を少し出放れて小川あり橋也是より三丁余過て左の方の路辺にこしわら堂とて一字あり内に木像二躰安置す各烏帽子に鎧を着し弓箭を帶し長刀を横たふ女躰也その粧ひたをやかにして武し是信父の庄子の子次信忠信か妻の影像成となり又是より坂をのほり鎧こほしとて難所ありたやすく馬足の通路を得かたし右は谷深くきれてはるかに險阻なり左は大山〔16ウ〕聳へ大石道によこたわる其間甚た險難なり爰を過て右の方にはんきう沼逆あり是より二丁余過て右の方に山鳥明神とて小社あり此間皆以大山越なり

一 越河

十八丁五拾六間

駄賃拾六文

此間右の方に刈田郡と伊達郡の境石の大仏を立り又越河より此辺迄田の面に片葉の芦とて一方へ葉の付たる芦あり尾花も葉のさす方へ靡てことよふ也金ヶ瀬よりは迄刈田〔17才〕御関所は越河の町中にあり此所にも紙を漉渡世とす是又海道山坂なり

公儀御領

一 貝田

一里六町

駄賃三拾六文

町入口に見禪寺といふ寺あり又町中に小川あり橋有町を出て瀧川とて有右に高き山有国見山といふ伊達の大木戸是なり此辺戰場なり阿津檜山経ヶ岡石那坂国見の宿沢原等此辺なり頼朝卿泰衡追討の為鎌倉より発向の時文治五年八月七日〔17ウ〕伊達郡阿津賀志山の辺国見沢に宿陣す泰衡は日来頼朝発向の事を聞及び阿津檜山に城壁ヲ築キ国見の宿と彼城の間に俄に口五丈の堀をかまへ逢隈川の流を堰入れ柵とし錦戸太郎を大將軍として金剛別当父子以下の軍兵二万騎を相添泰衡は国分ヶ原鞭館に陣す又信夫の佐藤庄司は伯父川辺太良高経伊賀良目の七郎高重を引くし石那坂の上に陣す此方へは中村常陸入道念西の息常陸の冠者為宗同次郎為重同〔18才〕

三郎資綱同四郎為家兄弟四人潜に杭の内より伊達郡沢原の辺に進出數刻相戦ひ佐藤庄司川辺太郎伊賀良目七郎以下宗徒の者十八人の首を得て阿津檜山の上経ヶ岡に梟すとくはしく東鑑に見得たるに今国見山の麓に堀の跡あり文治五年より元禄七年迄五百六年になる是より海道東路なり

公儀御領

一 藤田

一里七町

駄賃貳拾七文

此間八幡川といふ有是より左に靈山并築川の辺見ゆる太平〔18ウ〕記に奥州の国司北畠の中納言顯家卿奥州の守護として此靈山の城に居給ふ由見へたり此靈山は伊達の様に見ゆれ共刈田郡伊具郡の岑続き成故に仙台領分なり又此近辺白根といふ所に文学上人の墓あり又東鑑に文治五年八月十日小山七郎朝光直に宇都宮左衛門朝綱か郎從紀の權守波賀次郎大友以下七人藤田の宿より会津の方に向ひ土湯の烏鳥取越を攀登り大木戸の国衝か後陣に迫り関を作る是に驚〔19オ〕阿津賀志山落城すとなり又海道より西の方に伊達政宗卿父輝宗卿の城跡あり

一 棄折

一里半

駄賃四拾貳文

町より五町余過ておほか沢とて小川あり土橋也源義經奥州下向の時北の方御産に此沢の水を産湯に參らせし所とそ是よりしておほか沢といふと馬奴の語しいふかし爰過て永倉といふ在家あり右の方に天王の社有此間に小川二つ流るゝ土橋なり又此右の方に〔19ウ〕満勝寺といふ寺あり仙台北山満勝寺旧跡也伊達先祖常陸の入道念西の御道号也此寺に頼朝の御位牌有しをきやらを炊者これを服すれば速に治すといふならはし削り取事年久し殊安置の観音堂も零落する故に位牌も朽ほるひん事を悲み仙台の満勝寺へ送りうつしたる也此辺満勝寺村といふ右位牌の銘

右大将頼朝台靈卜書り〔20オ〕

棄折よりも瀬上よりも信父の里の丸山へ行道あり是佐藤庄司か旧跡なり次信忠信か石塔なてんの桜とてあり名木の様に世に云伝るな

り南向の座敷の前に植し桜成故に南殿の桜といふ事歟此海道より丸山へは田舎道三四拾里の道法也又此間に薬師堂あり田舎道とは六丁一里の事也

堀田下総守御領十万石

一 瀬上

一里半

駄賃四拾貳文

此間に鎌田といふ在家二町也中に鞠子川といふ小川あり兎か塚月の輪の〔20ウ〕御所といふ旧跡ありと心安と云る隠士の書たる道鑑といふ物に載たれとも其由来を記さすかの辺の里人に尋れとも其所さたかならず又信夫は郡の名にして名所ゆへ諸集に古哥多し

新古今集

橘為仲朝臣

あやなくも曇らぬ宵をいとふかな信夫の里の秋のよの月

彼為仲も陸奥国の守にて武隈に居り住はて、読り武隈の〔21オ〕松の哥あり又此間に本内云在家あり松河といふ河あり伊賀良目といふ在家あり又右の方に青葉山という有名所也但名所の国さたかならず類字名寄にもいろく、に書置り此山の麓に観音堂あり

同御領

一 福嶋

一里三十四丁

駄賃六拾貳文(但若宮迄)

宿の内に報願寺大林寺光禪寺此外諸宗の寺数多あり町を出て深川といふ川あり橋也此川下に弁才天立給ふ又荒川といふ川〔21ウ〕あり郷の目村といふ在家あり此あたりを加茂の川原といふ名所也是よりのほる坂をふし拌み坂とて大山にして長き坂也

藻塩草

陸奥のかもの川原をふしおかみふるきのおふち陰もなれにき

是より海道山坂を行加茂の川原といふ所も今は田となれり福嶋は絹の出る所也むかし伊達絹とて秀衡か基衡か（しむへい）〔22オ〕師雲慶に送りしも此絹成へし但し福嶋は信夫郡にていにしへのしのふの里なりもちすりの石も此所の沼にありといへり米沢へ行道の右の方に

あり又はるか右の方に信夫山見ゆる

同御領

一 根木町

一里

駄賃四拾貳文（但八丁目迄）

此間山坂を行海道也此根木町往還の馬次なれとも宿にはあらずせまき所なり〔22ウ〕

同御領

一 若宮

一里

駄賃三拾貳文

此間に浅川といふ小川あり

同御領

一 八丁ノ目

二里六丁

駄賃六拾八文

此間吉倉といふ在家あり又福嶋と二本松領との境あり爰に八丁目の古館あり遠近漸二二間の所にて此館少もみへす旅人は是をあらそひ旅行の戯となすなり

丹羽左京殿御領十二万石

一 油井〔23オ〕

此間に小池といふ金山あり

一 二本柳 一里九丁

駄賃三拾七文

此間に福岡といふ在家あり宿の内右の方に長谷の観音堂あり山坂多しといへとも二本松領は海道をよく作る故に往還通路心よし

丹羽左京殿御領居城

一 二本松 一里半

駄賃三拾五文

此間宿の入口に茶屋あり足軽町へつゝ城下町中に坂あり町中右の方に城の大手門見ゆる又町に大音寺心行寺朝石寺蓮華寺八〔23ウ〕幡の社あり町すへも足軽町也此所を少過て正法寺といふ在家あり

同御領

一 杵田 一里半

駄賃四拾三文

此所の家々温石を商ふ宿出て茶屋あり此間に松串村といふ在所あり此辺安達郡にて二本松杵田本宮ノ辺いにしへの安達か原なり名所にて古哥多し此原の黒塚にむかし鬼の住て往来をなやめしと謡にも作れり杵田より本宮への出はなれに薬師堂あり爰の縁起に曰人皇四十五代聖武帝の御宇神〔24オ〕亀三年丙寅の秋紀州那智の東光坊祐慶廻国の時此安達原に來り悪鬼を降伏し別其所を黒塚と号く当院の本尊人肌薬師如來は彼東光坊祐慶筈の中に安置する所なりとおもふに是まことの鬼にはあらし大江山鈴鹿山などに籠りて人をなやめし凶賊の類成へし深き山広き野原に穴をかまへかくれ居て旅人をなやめし人の財産を奪ひとる此輩人倫にましわらされは髪鬚なかくみたれ手足の爪尖り面あかつき猪鹿の皮などを〔24ウ〕身にまとひぬれば人間にあらぬ有様是こそ鬼といへるものそとおろかなる者の怖怪むを其假に書たる事成へし

平兼盛

陸奥の安達かはらの黒塚に鬼籠れりといふはまことか

白妙の裾野の草のかりころも安達かはらの雪の明ほの〔25オ〕

丹羽左京殿御領

一 本宮 三里 駄賃八拾四文（但福原迄）

此宿中に川あり橋也入口に誓伝寺花蔵寺といふ寺あり町に八幡の社左に薬師堂町出て右の方に観音堂あり爰に会津海道有是より少過
て瀬戸川といふ有此橋を舟橋といふ少川上に会津海道へ行道の橋を人取橋といふいにしへ正宗卿の軍場也道過て新田といふ在家あり

同御領

一 高倉 一里 駄賃三拾五文（25ウ）

此間に五百川といふ川有又海道の左の方に安積山あり右に安積の沼の跡あり是より西南の方に当て山の井あり海道よりは田舎道五拾
里をへたつ安積山の向なり今は田になる何れも安積郡也むかし葛城の大君勅に依て陸奥へくたり給ひしに人々饗応仕けれども大君の
心とけさりしに近郷の采女御傍に寄て大君の御ひさをたゝき御前なるかわらけとりあけ浅賀山影さへみゆる山の井のと哥を謡戯れけ
れは御感甚しかりしとて古今の序にも安積山の言の葉は采女の戯れ（26才）より読しとあり

古今集 采女

安積山かけさへみゆる山の井のあさくも人をおもひけるかな

続千載集 前大納言為世

山の井も増る水かさにくらしかかけさへみへぬさみたれのころ（26ウ）

又此辺に左の方に三春の城幽に見ゆる秋田安房守殿居城なり五万石の城主なり

同御領

一 日和田 三拾三町 駄賃貳拾貳文

宿入て西方寺といふ寺あり又地藏堂あり別当東正寺といふ此当りにて五月五日に菖蒲草を葺すしてかつみ草を葺と云伝へし実方中将

の云けるは此所に菖蒲のなきうへは本文に水草を葺とあれはいつれも同じ事也かつみ草を用ゆへしと教られけると云伝侍る所に〔27才〕

藤原孝喜

菖蒲草引手もたゆく長根のいかて浅賀の沼に生けん
と説る此辺にも菖蒲のなきにはあらねと彼実方の中将の下りし時何のあやめも見へぬ賤か軒場にいかて都と同じ菖蒲草をは葺へきとの給ひしよりかつみ草を葺伝へ侍ると宗久か記行にありされとも今は其故なく菖蒲草を葺なり又かつみ草をかゝみ草と〔27ウ〕い
ゑり此日和田の宿には濁師多くあり

同御領

一 福原 一里半 駄賃四拾三文

宿の入口に水神の社あり七月廿日に祭る并薬師堂あり宿のすへに本誓寺といふ寺あり又宿より二丁余行て坂の上に堂あり又松本橋とて小橋あり此間に窪田といふ在家ありあふし川といふ川あり又大てう屋敷といふ在家あり

同御領

一 郡山 十五町 駄賃拾三文〔28才〕

此間平路にして山川なし

同御領

一 小原田 七町 駄賃八文

此間日出山へ行詰て作井川といふ小川あり

同御領

一 日出山 十八町

駄賃十六文

宿のすへに茶屋川といふ川あり

同御領

一 笹川 一里式十八町

駄賃五拾五文

此間に実小路とて在家あり是は本多出雲守殿御領成居城は是よりにし〔28ウ〕稲村といふ所也二万石の城主なり此実小路にて雁を飼置圀として獵をするなり此間にへに川とて有又下宿とて在家あり又岩瀬の松とて右の方の道際に松あり爰に鎌足明神の社あり又行川といふ川あり釈迦堂川といふ川あり右の下宿在所よりは松平下総守殿御領也是より海道猶又平路なり

一 須賀川 三里

駄賃八拾六文（但中畑新田迄）

此間に方八町といふ在家あり景浪新田高くと新田とて在家軒を並〔29才〕へり右の家つゝき中頃景浪高くと分る境印に町の内左の方に松一本植置なり

同御領

一 笠石 十六町

宿入口に笠石あり海道の方也長西寺といふ寺あり宿出はなれてとひのこせんとて小社あり

同御領

一 久米子 式拾八町

此間平路なり〔29ウ〕

同御領

一 矢吹 八町

此間出口に茶屋あり此茶屋の蕎麦切名物成とて旅人大形爰にやすらふ

同御領

一 中畑新田 二里

駄賃五拾七文(但小田川迄)

此間平路なり

同御領

一 大和久 八町

此間平路なり〔30オ〕

同御領

一 踏瀬 八町

此間平路なり

同御領

一 大田川 十六町

此間に大仏あり海道の右に八幡の社あり

同御領

一 小田川 二里 駄賃五拾三文

此間に根田井になご沢といふ在家あり又大山をこゑて行坂を八町坂といふ此坂こゑて泉田といふ在家あり是より段々山坂なり白川へ行詰て〔30ウ〕右の方に米沢海道あり

同御領居城

一 白川 一里三拾三丁 駄賃五拾九文

宿の入口を寺町といふ足輕町あり爰の右に圓法寺といふ寺左に薬師堂あり阿武隈川を渡り町へ入右に千念寺正蓮寺左に永藏寺山千寺右に庚申堂薬師堂別当の寺あり又右に天神の社あり爰を天神町といふ中程右の方に城の大手門あり升形見ゆる天神町過て次の町に小河二つ流る、板橋也此川大やんた川小やんた川といふ爰の右の方に野郎か茶や〔31オ〕あり蕎麦切を商ふなり是海道第一の名物なり近年此茶屋二軒なる暖簾ぬるまじに本野郎新野郎とするす又いにしへの白川の関といえるは左の方の山上なり木立物古ふるてみゆる名高き所にて諸集に多くの哥あり

後拾遺集 能因法師

都をは霞とともに出しかと秋風そふく白川のせき

此哥能因都にて読けるか此哥の為に猶其国に至りて読さらんは〔31ウ〕無念成とてあつまへ下りたると世に偽り久敷籠居して後披露しけるとかや其後終に下りて八十嶋の記など、云物を書けるなり又文治五年七月廿五日源頼朝此関を越給ふ関の明神に奉幣仕給ふ

此間に梶原景季をめして当時は初秋なり能因法師か古風を思ひ出さるやと有しに馬をひかへて一首を詠す

梶原景季

秋風に草木の露をはらはせて〔32才〕君かこゆれは関守もなし

此関の観音の何の比にか仙台へ飛去給ふと云なりいふかし此麓に別当の寺あり満願寺といふ又此海道に革籠の宿とて在家あり世話にいふむかし奥州へ通ふ商人三条吉次信高兄弟盜賊の為に宝物をうははれしに革籠はかりを捨置し所成とそ右の方木立見ゆる所に吉次兄弟三人の墓ありといへりいふかし近來奥州の人武州へ行とて此関にて

行行駐馬望前山 一片浮雲兩國間〔32ウ〕

思昔能因詠歌所 秋風吹去白河関

同国の人其後此関にて件の詩をおもひ出和して

秋風にむかしをおもふ旅ころも浦ふれこゆるしら川の関

又貞享四卯初秋の比心ならず武州へ行いつ帰らんもしら川の旅はうきならいなれは心ほそくて一言を詠す

秋風にさそはれて行つゆの身の〔33才〕消なはとめにしら川の関

同御領

一 白坂 三里八町 駄賃九拾八文

宿に観音寺といふ寺あり町より七八町過て奥州と下野の境に明神あり小坂をへたて、右の方に兩國の明神各其地に跡をたれ給ふ是旅行を守神也行人必下馬して拝す或説に奥州の方成は関東の明神野州の方成は奥州の明神成といふ其いわれなし奥州の方成は奥州の明神野州の方成は関東の明神也旅人参詣して旅行の無事を祈る別当の寺あり〔33ウ〕奥州のは法心寺野州のは妙光院といふ扱此明神の前海道左の方は茶屋数ヶ所あり皆以餅を商ふて渡世す旅人爰にやすらふ爰少過て山中大徳といふ在家あり夫過て寄井といふ在家あり大関信濃守殿御領なり居城は是より西黒羽根といふ所二万石の城主也此宿少出て道の傍に観音堂ありふるみといふ所に小川あり

此次に高瀬加小沢板屋など、て在家あり又爰左の山際に薬師堂あり又海道より右の山際は岑岸村といふ此湊に遊行柳あり今も清水流る、昔の海道は爰なりと〔34才〕いゑり

西行法師

道の辺のしみつなかる、柳かけしはしとてこそ立とまりつれ

此柳は鏡山の西の山下なり寺あり近所成爰は芦野御領也又柳より少南の方に三ツ葉の苜蓿（イロハハコ）ありといふ奈良川といふ川を渡りて芦野町へ入此川片瀬川黒羽根芦野境なり〔34ウ〕

芦野民部少輔殿御領居城三千石城主

一 芦野

三里

駄賃九拾文

宿に見忠寺といふ寺あり城は町の左の方に大手門あり山城なり町出て奈良川を渡る西村と云所を登る坂を石堀坂といふ又従是半里程過て黒川と云川あり黒羽根と芦野領片瀬片河なり此次にへひ沢石那坂又寺子といふ在家あり爰は公儀御領也

大関信濃守殿御領

一 越堀

貳町

駄賃六文

此間になます川と云あり常州かつくらの中川の上なり水少シいて、も石〔35才〕なかれ下りて越かたき川也此水上三里に殺生石あり今も此石の辺に立よれば人間はいふに及す畜類迄も命なしと云習わせり

公儀御領

一 潟掛

三里八丁拾四間

駄賃九拾文

是より那須野の原につきて行也建久四年三月九日那須の太郎光助下野国北條の内一村を拝領す是来月頼朝卿於那須野に野遊ひ有へき

の間経營の爲にあて行わる、と云々同年四月二日頼朝那須野を歴覽仕給ふ去ル夜の半更以後より勢子を入小山左衛門尉〔35ウ〕朝政宇都宮の左衛門尉朝綱八田右衛門尉知家各めしに依て千人の勢子を献す那須の大郎光助駄餉を奉ると云々町に正頼寺といふ寺あり此間ほつこめ千沢上の坊野間川染田練田練貫など、云在家あり此練貫は矢を作所なり此沢下原小松原市の沢沢田等在家あり又左の方に棚倉への海道有又上の台とて在家あり

大田原備前殿御領居城壹万石

一 大田原 一里貳拾八丁 駄賃五拾三文

宿入口に川あり右の方に秀命院上の坊浄泉院左に不賞院又町中右に〔36オ〕正法寺又町の出口に薬師堂并別当の寺あり宿中左の方に城の大手門有此間上原中并小町あり吉沢在家あり小川あり右の方に寺有日光海道也

一 咲山 貳里三十壹丁 駄賃八拾四文

宿入口に伯耆川と云あり町に安樂院光徳寺といふ寺あり城は町中右の方に大手門あり此間引田原江川といふ小川あり曾根田在家あり

喜連川左兵衛殿御領居城五千石

一 喜連川 二里 駄賃六拾四文

宿少前にはたか新田とて在家あり爰の左の方に鬼渡リ権現とて宮有〔36ウ〕宿の入口に打川といふ川あり町へ入右の方に千念寺龍藏院左に地香院然光院又城の山際に蓮光院といふ寺あり城は宿中右の方に大手門あり是より鶴丸へ近し那須のはへか泊跡也宿出はなれて川あり荒川といふ此川こへて茶屋あり爰を過坂をのほれば左の山上に愛宕堂あり麓に香正寺とて別当の寺あり従是十町余過て五月乙女坂を下れば在家あり五月乙女村と云是より江戸迄海道平路なり五月乙女村の次に宇都宮領の境あり此辺に塩の屋の里といふ旧跡可有といふ人あるに此程所の者に問とも〔37オ〕しらす中勢卿の哥あり又出湯あり眼病を治すといふ

奥平美作守殿御領十方石

一 氏家

一里半

駄賃四拾八文

宿入口は桜氏家といふ宿出はなれて茶屋あり其向に地藏堂并八幡の宮あり此間に安久津とて船付の宿有此川を絹川といふ日光より落来る川なり此川の鮎名物也爰より川船に乗り古我小山関宿千寿江戸へも行なり

同御領

一 白沢

式里式拾八町

駄賃七拾壹文〔37ウ〕

宿入て右の方に地藏堂あり此間十五里原を行是より駿河の富士南に見ゆる原中に新田町あり夫過て竹林新田といふ所少し在家あり爰にたかふ神とて道より右の方に石にて作れる小社あり

同御領居城

一 宇都宮

二里壹町

駄賃六拾貳文

宿入口に田川といふ川あり橋也右の方に光禪寺といふ寺中町に玉川といふ小川あり右の方に大明神立給ふ正一位大明神とあり式伝に此神は津々子和氣の尊と云しとて是関東の守護神なりといふ又宇都の宮〔38オ〕明神は猿王と申て日光明神の御子なりと云説有文治五年七月廿五日頼朝卿下野国古多橋の駅に着御先宇都宮に御奉幣立願あり今度無為に征伐せしめは生虜一人神職に奉るへしとて別御上箭を奉らしめ給ふとなり古多橋は今の城下の町なり城の大手は町の左の方なり平城なり又宇都宮より日光海道あり日本事蹟考に曰下野国河内郡二荒山一名は日光山又黒髮山但し黒髮山は別の山なりといふ深山の上に湖有て其奥に温泉あり山中に栖霞あり鷹〔38ウ〕の巢又洞穴所々に有元享釈書に曰往昔此山二荒山とて諏訪明神立給ふ其時迄常に嵐烈しく覺事冬のことし神護景雲元年七月の比勝道上人はしめて登る又天応元年孟夏に又のほる此時二荒山と書故に此山荒る成とて日光山と書かへたるとて勝道上人は下野国芳賀郡の人若田氏花嚴宗と云々委右の書に見えたり

続古今集に

人丸

むは玉の黒髪山を朝こえて〔39才〕木の下露にぬれにけるかな

発句

宗祇

日の光る山て月見る今夜かな

中禪寺の嶺遠所より見ゆる高山なり此いたゝきに大き成湖つづみ水あり又足尾山といふより銅出る此銅山の廻り八日斗に廻り合といふいつの比より此銅出初けるといふ事を知す何も日光本山也文治五年十月十九日頼朝帰陣の時大明神へ参詣是願成就に依てなり則一の庄園をよせ〔39ウ〕奉り扱又奥州の生虜まろ樋爪の太郎俊衡法師か一族を当社の職掌とすと又是より南西に当て足利といふ所あり自今読書堂あり爰に源義兼の墓あり足利又太郎忠綱も爰におれり小野篁も爰に住せしなり其後篁の読書の所に光聖の像を鑄て安置す教授する者相統して是に居す東別の人來つて学す五経正義孝経論語孟子の注疏等是なりみんとする者求むれとも外借を許さず足利の学校がっこうとすといえり源の高氏都を逃て筑紫へ下り菊池とたゝ郎〔40才〕浜にて戦ひし時光聖の像を位して遂に勝事を得たりと云々
勝道上人の日光山へ初て登り給ふ神護景雲元年より元禄七年迄九百十八年なり二度の山上天応元年よりは九百十四年になる扱宇都宮を出て此間に系そ嶋横田新田などゝて在家あり旧の宮へ行詰て左の道際に明神あり

同御領

一 旧宮

一里半五町

駄賃五拾文

宿入口左の方北福院といふ寺あり此間に小夜田新田小山新田とて〔40ウ〕在家あり

同御領

一 石橋

一里半

駄賃四拾四文

此間に原中下石橋とて在家あり又町の左の方に常州筑波への海道あり

三浦志广守殿御領居城は従是西三生式万石

一 小金井 式十九丁 駄賃貳拾八文

宿中左の方に普賢寺右の方に禅龍寺といふ寺あり

公儀御領

一 芋がら新田 一里十一町 駄賃四拾文〔41才〕

此間に木沢といふ在家あり爰に日光海道あり此道に宝の八幡といふ名所あり池の中に八ツの嶋あり八神を祭るといふむかし此国の福人故ありて庭の池の辺りにて薪をつみ魚を焼しを舟人これをとりにて以て古事とす古哥多し

詞花集 藤原実方朝臣

いかてかは思ひありともしらすへき宝の八嶋のけむりならては〔41ウ〕

千載集 源俊頼朝臣

煙かと宝の八嶋を見しほとにやかても空のかすみぬるかな

続千載集 藤原宗秀

霧はるゝ宝の八嶋の秋風に残りてたつはけむり成けり

又近来酒井讚州日光山参詣の時此所にて〔42才〕

今みれば宝の八嶋もあわれなり煙そちかき老の身なれば

此外日光参詣の公家高家の哥数多あり此間にすかた川飯塚といふ在家あり

公儀御領

一 小山

一里半

駄賃五拾文

宿入て光法寺盤念寺左に千寿院右に保正院といふ寺あり宿中に小川あり又左に浄光寺右に祇園の社左に明神又右に地法寺など、云寺〔42ウ〕あり古館とて町の裏に木立物故て見ゆるあり是則小山下野大掾政光か住ける館の跡なり政光は秀郷將軍の末流として藤氏小山の小四郎朝政長沼の五郎宗政結城の七郎朝光等皆是政光か子也治承五年二月廿三日志田の三郎光生義広足利の又太郎忠綱をかたらひ三万余騎の軍士を卒し鎌倉に越頼朝卿を亡さんとす爰に小山足利は藤家一流の威をあらそひ同志せざるの間此姿を以て先小山をも打亡ぼさんと企つる折節政光は皇居警衛のため在京せしむるに依て郎従委く〔43オ〕是に相隨ひむせたるの間老軍等偽りはかりて同志すへき中を云つかはす義広喜悅のおもひをなし則小山に来る朝政は兼て支度せしめ是より先に小山の館を出て野木の宮に引籠る義広彼宮へ追掛得所に朝政謀を巡らし登々呂木の沢地獄谷木の林の梢に人をのほせ鯨波をつゝらしめ其声谷に響大勢の粧ひをなす依之義広忠綱大きにあわて、迷惑す是より合戦始り寄手あまた討れ義広忠綱逃亡す忠綱は人に勝れたる事三つあり一つには其力百人に対す二には〔43ウ〕其声十里に響三つには其函長さ一寸に成こそ是より西海に越とも聞え又此時討死せしともいえり治承五年より元祿七年迄は五百十三年に成野木の宮は右の方にあり此間に千駄宿栗の宮といふ在家有爰より多門院といふ寺あり

一 間々田

一里半九丁

駄賃五拾三文

宿入て右の方に浄光寺藏正寺といふあり又不動堂あり此間に乙女村といふ在家又乙女河岸ともいふ江戸よりの舟着也左の方に香法寺〔44オ〕といふ寺あり又雁沢といふ所右の方に茶屋四五軒あり又友沼といふ在家あり爰の左の方に八幡宮右に寺あり又此次に松原とて在家有

一 野木

式拾五丁

駄賃式十三文

宿入て右の方に浄妙寺又萬願寺といふ寺あり是より拾丁はかり行海道右の方の道より式丁程のきて野木の明神の宮あり前に記す小山

朝政が籠りし所也又此所にて明神の忌物とていにしへは小角豆を食せず今は其城なしといふ又野木の捨松とて路辺へさし掛りたる〔44ウ〕松あり弘法大師の捨置給ふ松成とかや近年大風に折し故古木はなし頃日植つくとなり

一 古我 一里半 駄賃四拾七文

宿入て本城寺英範寺万福寺光龍寺など、いふ寺あり又城内に頼政堂とて一字ありいにしへ源三位頼政の首をその郎等猪早太袋に入持て葬埋の地を求めんとて国々をめくる或時爰に來りて芝の上にやすみぬ暫有て立さらんと彼袋を取にあらず扱は爰こそ〔45才〕とて其所に葬埋し其身も爰に住て念仏すといふ龍崎といふ所なり早太か子孫残今古家の町にありて頼政堂を守るといふ又古我の城守不吉あらん時は此頼政堂めいとうして色々の奇怪ありとそ古我の宿にて刺足袋を所作として商此辺より常陸国筑波山見ゆる名所にしして和哥多し

古今集 宮地清記

筑波根の木の本ことに立そよる〔45ウ〕春の深山のかけを恋つ、

後撰集 紀貫之

常よりも春へになれば桜川浪の花こそ間なくよすらめ

一 中田 二里三町 駄賃

此宿の南に小千差原小境など、いふ所あり志田ノ三郎義広か野木の宮合戦の時軍場なり此辺に又太郎忠綱か討死せし所あり〔46才〕又此間をなかる、川は利根川とて名所なり上野国利根郡より落る故に利根川といふ大河なり舟の通ひ多く運送の便よき川なり俗に是を板東太郎といふ板東太郎瀬田次郎筑後三郎とて日本に三の大河の其一なりといふ又太郎忠綱か宇治川の先陣の時我等か国のとね川にはよも増らしといふ氣満となん又此少し川上に落合河といふ所は日光山又上野の佐野よりの落合なりといふ是より三里川下に関宿といふ所あり城下なり此川わかれて江戸への舟路〔46ウ〕と成本の流れは常州鹿島の方へ落て下総の海へ入なり房川といふ栗橋は

関所の名也

新勅撰集

橋仲達

笹わけて袖こそやれめ利根川の石は踏ともいさ川原より

此名所名寄集には上野国に入る也房川大渡し公儀の渡し船出る故に夜中自由ならず所により縄渡し舟を以渡すなり〔47才〕

公儀御領

一 栗橋

二里二町

渡船より上り宿の入口右の方に関所の御番所あり旅人下乗す此宿の右の方に一言の宮とて小社あり是義経の妾しつかの墓成と云伝る
杵の大木ありて海道より見ゆる又はより西に鷺の宮迎あり頼朝卿崇敬の事東鑑に見えたり此間道三ヶ二八利根川に流て土手を行土手
の右は農家統く是過て高柳新田外記新田とて在家有又横堤といふ所に出羽橋とて橋二つあり此次にかうまといふ在家〔47ウ〕あり
又栗橋とは渡しより上西の川の名なり渡しより下ひかしを田中川といふ

公儀御領

一 幸手

一里半七丁

駄賃五拾三文

宿入て右の方に東福寺といふ寺あり又宿出てきれ橋といふ橋あり右の方に岩築海道あり此間に上中野といふ在家あり爰の左に正頼寺
といふ寺右に薬師堂あり此次に下野といふ在家又高野村と云在家あり又幸平より東へ一里へたて、しま氏村といふ所あり爰に将門〔
48才〕の墓所あり定泉寺とて真浄土宗の寺あり此寺の住持の外汚穢不浄の輩此墓へ近付は忽死すと云伝へり将門の骸を葬埋の所なり
とそ又其近辺にきたちといふ所あり是将門の公達かくれ居候所なり今俗にきたちといふと謂り将門の首は神田明神と祀し也

一 枚戸 一里半 駄賃四拾七文

宿入て法正院といふ寺あり此間に三本木蔵久又は土岑など、云在家あり爰の左の方に八幡宮右に地藏堂あり〔48ウ〕

一 糟壁 二里半十町 駄賃七拾八文

宿入て西松院光養寺といふ寺あり此次に新宿といふ在家あり爰右の方に地藏堂あり宿中に寺あり此次備渡村といふ在家此間に小橋あり此次大條宿在家あり右に盤行院といふ寺左に薬師堂此次まくり村といふ在家左に八幡宮あり此次大林井おいれ町爰右に薬師堂あり

公儀御領

一 越谷 一里半拾丁 駄賃五拾弍文〔49オ〕

宿を入左に誓造院といふ寺あり此間に蒲生村といふ所左の方に茶屋七八軒あり橋あり又左の方に続瀬川といふ小川道に添て流る、草賀へ行詰て板橋あり

公儀御領

一 草賀 二里八丁 駄賃六拾五文

此間瀬崎といふ所に石橋あり保木間といふ在家此次嶋根井といふ在家此次桜田といふ右の方海道際に佐竹右京大輔殿下屋敷あり

同御領

一 千寿 二里 駄賃七拾文〔49ウ〕

此間小塚原といふ斬罪場あり左に番所あり従是右の方に三野村遊女町見ゆる土手続なり浅草入口に隅田川流る、武蔵と下総の境なり夫共下総の名所に入又此川に都鳥といふ鳥あり喙と足赤き鳥なり形鴨に似たり好て蛤を食す又此川辺に梅若丸の墓あり木母寺といふ

寺あり三月十五日忌日成とて仏参多し

古今集

在原中将業平

名にしおは、いさ言とはん都鳥〔50才〕 我おもふ人はありやしやと

源俊成卿

いにしへの秋の空まで隅田川月に云とふ袖の露かな

浅草町左に金龍山是待乳山なり下総の名所に入

新勅撰集

弁基法師

待乳山夕こへ来れはいほさきの〔50ウ〕 角田川原にひとりかもねん

此待乳山のうしろ浅茅か原といふ所に鏡か池とて梅若君の母身を捨むなく成し所あり又駒形堂とて道の左川際にあり隅田川の橋を

渡りて見付の升船に入武蔵野霞か関武州の名所なり

後撰集

紀貫之

女郎花白へる秋のむさし野は常よりも猶むつまじきかな〔51才〕

統千載集

前大納言為世

おなしくは空に露の関もかな雲路の雁のしはしと、めん

慈圓

呼子鳥霞か関そ声すなり過行人をたちとまれとや

此外武蔵野霞か関を讀し名哥共不可勝斗之武江の事平原〔51ウ〕 広野を見す千村萬洛鶏犬の声四方に聞へ朝日明々として夕日夜月

円かなり諸鳥充まし又所々に沼有て鯉魚喜魚を産すと云々寔目出度江戸の賑ひ萬々歳恐れ謹て奉賀

往還もたへぬ霞か関の戸をさゝて久しき君か代の春

いく秋も曇らぬ御代のためしには月影広きむさしの、はら〔52才〕

仙台領分名所旧跡

一 不忘山 名所

刈田郡白石の嶽なり蔵王の嶽といふ委しく江戸道中記にあり

一 千振 旧跡

柴田郡葦神山の事也前に記す

一 根無藤城 旧跡

刈田郡也泰衡か良從勾当八金十郎赤田次郎大將軍として防戦〔52ウ〕するの所に頼朝の御勢安藤四郎飯富源内以下根無藤と四方坂との間にて両方進退七ヶ度に及び凶徒敗績の事吾妻鑑にあり今に其時の軍場残れり又根無藤といふ事は源頼義河部の貞任退治の時此所にて藤の鞭を取落し給ひしか枝葉生して杜の木に取付数年を経たりし故に根無藤といふ

一 四方坂 旧跡

刈田郡根無藤の城近所なり〔53オ〕

一 大高宮 旧跡

柴田郡也用明天皇の御廟といふ錦戸太郎討死の所なり道中記にあり

一 有野無野関 名所

又無野の関ともいふ出羽奥州の境なり今は笹合峠といふ東鑑には大関と書坂の上に無野の観音堂あり

藻塩草〔53ウ〕

武士の出さ入さにしほりするとや／＼鳥の無野／＼の関

一 加嶋 名所

巨理郡小山といふ所にあり爰にひたの内匠か立たる堂あり

つゝくとも忘れすこゑん加嶋なる逢隈川にあふ瀬ありやと

一 阿武隈川 名所〔54オ〕

前の道中記にくはしく記す

詞花集 入道前大政大臣

君か代に逢隈川の底清み千年とへつゝ住まんと思ふ

一 稲葉ノ渡 名所

前の道中記にあり

一 東平王塚 旧跡〔54ウ〕

前の道中記にあり

一 阿武隈の館 旧跡

前の道中記に記すことく岩沼の館なり奥州の館は武隈ぶくまにありと後撰集にも書す又此館は多田の満中源重之藤原元良橘の道貞源孝義なと住す

一 二本松ふたもと 名所

此松は藤原元良朝臣植初けると後撰集にもあり又或説に此所を〔55才〕みきといふとそ

後撰集 藤原元良朝臣

武隈の松は二木をみやこ人いかゝとは、みきとこたへん

一 花輪ノ松 名木

武隈の近所也今は植松といふ此松も藤原元良植初しと也其後野火に焼しを植次しとなり〔55ウ〕

一 笠嶋 旧跡

道祖神并実方中將の事前に記す

一 名取川 名所

前にしるす

一 名取ノ御湯なとりのみゆ 名所

今秋保の温泉の事なり

拾遺集

平兼盛〔56才〕

覺東な雲のかよひ路見てしかなとりのみ行は跡はかもなし

此秋保の湯柴田郡に入といひ名取郡なりと両方あらそふ事はかしか此兼盛の哥故名取郡に治定す

一 宮城郡

名所

千載集

源俊頼朝臣

さまく心に心そとまる宮城野の〔56ウ〕花のいろく虫のこゑく

宮城野の萩とて名木也余の萩とは枝葉花の色も異なり

一 本荒ノ里

名所

今本荒町の事成といふ

古今集

読人しらす

宮城野、本荒の小萩露をおもみ風を待かと君をこそまで〔57才〕

宮城野、萩の名にたつ本荒の里はいつよりあれはしめけん

此外諸集にあまた哥あり

一 木の下

名所

宮城郡国分薬師堂林の事也此堂は大回元年坂上の田村麿の建立寺領も將軍の寄附する所なりと程経て後白川の院御再興奉行藤原後成卿と云々大同元年より元禄七年まで〔57ウ〕八百五十六年に成

御待みかさと申せ宮城野の木の下露は雨に増れり

一 榴ヶ岡 名所

天神の御社あり此所は鞭楯むちすげとて城跡なり吾妻鑑ごまがたみに曰二品陸奥伊達郡阿津賀志山の辺国見沢に恙御仕給依て西木戸太郎国衛は阿津賀志山と国見の中間に城壁しろがきを築き防戦の用意す又〔58才〕刈田郡にも城郭を構へ名取広瀬の両河に大縄の柵を引奉衡は国分か原鞭楯むちすげ二陣すと云々

哥枕

陸奥の榴か岡の春つゝらつらしと君をけふそしりける

一 玉田横野 名所

此所東照権現宮鳥井の辺なり又河内国にも同名あり〔58ウ〕

取つなけ玉田横野のはなれ駒榴か岡にあせみ花さく

一 青葉山 名所

此所さたかならず八雲御抄并能兼抄には若狭の国清輔抄には陸奥の国宗祇国分には近江国に入奥州にても所不分明御城の裏林ともいふ又伊達郡棄折あしなの海道右の方の山際に寂光寺という寺あり山号を青葉山といふ此山の事歟相州にも同名あり〔59才〕

千載集

前大增正覚忠

常盤なる青葉の山も秋来れば色こそかへねさひしかりけれ

一 沖の井 名所

宮城郡八幡村やわたにあり又沖の石とてあり

古今集

小野小町

一 物見の岡 旧跡

今仙台より七北田へ行堤の北海道より右の方の山の事成といふ又国府の中山と云しは今の中山の事成へし頼朝物見の岡も心えなしとて小山兵衛尉頼朝同五郎宗政同七郎朝光下河道庄司行平をつかはし〔61ウ〕給ふ各彼岡に馳向ふ所に大将ははや先立て落失跡には幕斗引残して郎従わつか四五十人は是を防ぎ戦ふ朝政宗政朝光行平武勇を励もみ立ける間或は討取又は生捕皆悉く是を獲たり夫より大道をへて頼朝の御跡を追行と云々

一 多加波々城 旧跡

玉造郡名生定村の古館成といふ文政五年八月廿日卯の刻に頼朝此城に押寄三方より困責給ふに泰衡は疾逃亡して纔に残りたる〔62オ〕若党郎従等甲を卸帰降す夫より葛岡郡に出て平泉に赴給ふとなり葛岡郡とは今の葛岡村成へし

一 末松山 名所

宮城郡八幡村にあり山下に禅寺ありて末松山と額を打又此所に奥の細道とてむかしの海道あり宗久か記に末の松本の松とてあり西行法師下向の時に書本の松は岩切にありと末松山の哥に

古今集 清原元輔〔62ウ〕

浦ちかくふり来る雪はしら浪のすゑの松山こすかそとみる

君をおきてあたし心を我もたは末のまつ山浪もこしなん

一 戸絶の橋 名所

岩切にある轟の橋と今いふなるへし

藻塩草〔63オ〕

あやふしと見ゆる戸絶の丸木橋まつほとかゝる物思ふらん

一 松賀浦島 名所

宮城郡今は松か濱といふ

後撰集

素性法師

音に聞松か浦嶋けふそみるむへも心ある海士は住けり〔63ウ〕

一 塩竈 名所

宮城郡なり町の入口左に正一位大明神立給ふ瑞籬（ミツリサキ）の内に貴船（ヒコネ）の明神糺明神左右に立給ふ又町裏にいにしへの塩竈四つありて何れも水をもれり此水の色各替り有

千載集

清輔朝臣

塩かまの浦吹風にきり晴て八十嶋掛てすめる月影〔64才〕

一 籬ヶ嶋 名所

塩竈同所也

古今大哥哥

わかせこを都にやりて塩かまの籬（ミツリサキ）か嶋の松そひさしき

一 浮嶋 名所

塩かま同所なり〔64ウ〕

新古今集

山口女皇

塩竈の前にうきたる浮しまのうきて思ひの有世なりけり

一 野田ノ玉川 名所

是も塩竈近所町中へなかれ出る小川なり此名所日本に六ヶ所あり山城に井手の玉川摂津の玉川紀州に高野の玉川武蔵の玉川近江に野路の玉川これなり〔65才〕

統古今集

順徳院御製

陸奥の野田の玉川見わたせは汐風こしてこほる月かけ

一 十府ノ浦 名所

岩切の近所也此所を菅十府に切るといふ今は其故なし但此所にてむかし菅筵を十府に滅たるなど云り

金葉集

経信卿〔65ウ〕

水鳥の水角の枕ひまもなしむへさ系けらし十府の菅菰

一 松嶋 名所

名高き所なり瑞岩寺の内に開山法身和尚住居仕給ひし窟あり此開山の時は圓福寺と云し也

遠上^テ 經山^ニ 分^リ 風月^ヲ 歸開圓福大道場

法身透得無一物 元是真磬平四郎〔66才〕

詞花集

元輔

松嶋の磯にむれるるあし田鶴のおのかさまく見えし千代かな

此松嶋和哥の浦明石の浦を日本の三景といへり又丹後の天の橋立も安芸の巖嶋を加て三景とす中にも松嶋絶景なりと云り

一 雄嶋 名所

松嶋同所むかし見仏上人住給ひし所也阿弥陀三尊寺の〔66ウ〕跡あり近代雲居和尚座禅仕給ふ所也

新古今集 宮内卿

心ある小嶋の泉郎の袂かな月やとれとは濡ぬ物から

一 真野萱原 名所

牡鹿郡真野村にあり

玉葉集 定家卿〔67オ〕

露にけん秋の朝けは遠からて都やいく日真野のかやわら

一 袖の渡 名所

新後拾遺 相模

陸奥の袖のわたりの泪川こゝろの中になかれてそすむ

哥枕 行家〔67ウ〕

泪川浅き瀬そなき陸奥の袖の渡りに舟はあれとも

一 奥の海 名所

此名跡遠嶋をいふともいへり又渡波なりともいふ

続古今集 順徳院

うし迎も身をは何処の奥の海鶴のゐる岩も浪やかくらん〔68才〕

又近来法眼猪苗代兼寿歳旦

試る労限なし奥の海

一 陸奥山 名所

金花山の事也大金寺金花山天女殿と号す山高さ直立にして百九十間東西南北二里十二丁辨財天の社三間四面従是東方九丁下りて水晶輪の幢あり何の世にか七尋は折て海底に没しぬ長も廻りも十三尋宛あり六角尖にして今切立たる様なり〔68ウ〕此山元より金山なれとも天女の守護まします故に取事不叶

哥枕 中納言家持

皇の御代さかえんと東なる陸奥山にこかね花咲

一 緒絶ノ橋 名所

志田郡古川村中の橋なりといふ三日町といふなり但し昔の橋は従是十町余水上なり〔69才〕

後拾遺集 左京大夫道雅

陸奥の緒絶のはしやこれならんふみゝふますみ心まとわす

一 玉造江 名所

玉造郡也緒絶の橋の水上なりといふ

玉葉集

入道前大政大臣

置露の玉造江にしけるてふ〔69ウ〕あしのすゑ葉のあらてとて思ふ

一 小黒崎

玉造郡名生定村なり

古今集

大哥所御哥

小黒崎美豆の小嶋の人ならば都の土産にいさといふまし

一 美豆小嶋

名所〔70オ〕

続古今集

順徳院

人ならぬ岩木も更に悲しきは美豆の小嶋の秋の夕くれ

一 小野小町塚

旧跡

玉造郡新田村の内也夜鴉の里といふ所にありと云定かならす

一 磐手ノ関

名所

玉造郡磐手山なり出羽奥州の境なり〔70ウ〕

続古今集

為家卿

くちなしの一しほ染の薄紅葉岩手の山はさそ時雨るらん

一 姉園ノ松 名木

此松栗原郡二の迫姉園村にあり古木は枯てなし近來植次しなり今は此松同郡梨崎村の内になる郷人失りて姉園村を梨崎村になす〔71才〕

伊勢物語

栗原や姉園の松の人ならば都の土産にいさといふましを

一 衣川 名所

磐井郡高館村をなかれて高館の古城の下にて北加美川へ落合也

哥枕

藤原親成〔71ウ〕

妹かすむ宿のこなたの衣川わたらぬおりも袖濡らしけり

一 衣ノ関 名所

高館へのほる古道の内にあり

詞花集

和泉式部

もろともに立ましものを陸奥の衣の関を余所に聞かな〔72才〕

一 栗駒山 名所

栗原郡の二の迫今駒ヶ嶽の事也又伊沢郡に駒ヶ寫といふあり是なりともいふ

夫木集

陸奥の栗駒山の朴の木は花より葉こそ涼しかりけれ

大和物語〔72ウ〕

栗原の山に朝たつ雉子よりも待にはあわしと思ひしものを

一 黒岩口ノ城 旧跡

栗原郡三ノ迫岩ヶ崎の城なり文治五年八月廿一日頼朝卿平泉に向はしめ給ふ所に泰衡か郎從栗原三の迫等におゐて要害を構て防ぎ戦といへり軍利なふして大将若次郎は三浦の介に討れ同九郎太夫は所の六郎朝光かために討るゝとあり〔73オ〕

一 津久毛橋 旧跡

同所三ノ迫平形村にあり頼朝君岩口を攻破り夫より松山道を経て津久毛橋に至らせ給ふ爰にて梶原平次景高一首の和哥を詠する由を申陸奥の勢は味方につくも橋わたしてかけん泰衡か首

一 天王寺 旧跡〔73ウ〕

玉造郡上野目村にあり日本に四ヶ寺の其一つ成といふ摂津国の天王寺を始として守屋大臣追善の為に聖徳太子の御建立成といふ守屋大臣の石塔あり高さ八尺廻り五尺五寸寺の脇に立此寺の本尊は聖観音如意輪観音二尊也運慶乃作と云々

一 庄子ヶ館池月ノ沼

玉造郡上宮村にあり旧跡といふさたかならず

一 白糸ノ瀧〔74オ〕

同郡名生定村にあり右同断

一 朽木橋 名所

栗原郡小野村にあり蕉谷の町近所なり

風雅集

藤原朝定

逢事は朽木の橋のたへくにかよふをりの道たにもなし

陸奥の朽木のはしを来てみれば〔74ウ〕ふみたに今はかよはさりけり

一 箱清水 旧跡

同郡同村にあり

一 善光寺 旧跡

同郡同村にあり信濃国善光寺を始めて日本三善光寺の其一つといへとも是も由来知れる人なし

一 小迫観音 旧跡〔75オ〕

栗原郡小迫村にあり此寺に頼朝卿の納め給ひし鞍の有しを或人住持に乞取て今はなしといえり田村將軍東夷征伐の時奥州七ヶ所に七観音を建立し給ふ所謂遠田郡饒の嶽山牡鹿郡牧山登米郡水越かなしく鱒淵東山ノ大竹又南部に一躰此小迫を合て七ヶ所也

一 上品寺 旧跡

栗原郡二の迫栗原村にあり真言宗也義経梨原寺に詣給と〔75ウ〕義経記書此寺の事也

一 大川口ノ館 旧跡

栗原郡一の迫大川口村にあり今は此館長崎村の内に成といふ是泰衡か郎従大河次郎兼任か居城なりといふ

一 平泉 旧跡

東鑑に曰文治五年乙酉八月廿二日雨降申の剋に頼朝平泉に着給ふ泰衡は逐電し家は烟と化し数町の縁辺は寂寞として〔76才〕人なし累跡の郭内徒に滅して地のみあり只颯々たる秋風幕に入の響ありといへとも蕭々たる夜雨窓を打の声を聞す但し坤の角に当つて一つの倉廩ありて余煙の難を遁る葛西ノ三郎清重小栗十郎重成をつかはしひらかせて御説あるに沈紫檀以下の唐木の厨子数脚あり其中に納る所の物は牛の玉犀の角象牙の笛水牛の角紺瑠璃等の笏金の沓玉の幡金の花鬘蜀江の錦直に逢さる帷子金の鶴銀造の瑠璃の灯炉南庭百各金〔76ウ〕の器に盛る其外錦繡綾羅の類計へ記すにいとまあらず象牙の笛逢さる帷子は清重に賜る玉の幡金の花鬘は重成望申に依て之を給ふ氏寺に莊嚴すへき由を申故也

むかしにもならさる夜半のしるしには今宵の月し曇りぬるかな

古城之覚

一 牡鹿郡日和山 葛西左京晴信〔77才〕

一 深谷矢本 深谷月鑑

一 栗原小野 大崎左衛門義隆

一 玉造降継 氏家弾正

一 同郡名主 蒲生飛驒守

一 同新田

新田刑部義隆

一 同郡一栗トシツク

氏家兵部少輔

一 同郡下野目シノノメ

輝井太郎高直〔77ウ〕

一 同郡葛西

西木戸太郎国衡

一 栗原郡高清水

石川越前守

一 同郡宮沢

葛岡左衛門

一 同郡沢邨

沢邨肥前守

一 同郡宮野

宮野豊後守

一 同郡花山瀨牛

阿部貞任

一 玉造郡名定

湯山修理〔78オ〕

関山中尊寺

寺塔四十余宇 禅坊三百余宇也

藤原清衡六郡ノ管領スルノ最初ニ是ヲ草創ス然リトイエトモ鳥羽院ノ御願所タリ寺領ヲ寄附セラレ亦御祈禱料ヲ募置ル先ツ白河ノ関ヨリ外ノ濱ニ至ル迄行程二十四箇日也其路一町毎ニ笠卒都婆ヲ立其面ニ金色ノ阿弥陀ノ像計ヲ図絵ス当国ノ中心山ノ頂上ニ於テ一ツノ墓塔ヲ立又寺院ノ中央ニ多宝塔アリ釈迦多〔78ウ〕宝ノ像ヲ左右ニ安置ス其間ニ関路ヲ旅人往還ノ道トス次ニ釈迦堂三百余体ノ金容ヲ安ス即釈迦ノ像也兩界堂兩部ノ諸尊ハ皆木像タリ皆金色ナリ次ニ二階ノ大堂高サ五丈本尊ハ三丈金色ノ弥陀ノ像脇立ハ九体ハ同丈六也次ニ金色堂上下四壁内殿皆金色也〔俗ニ光堂ト号〕堂ノ内ニ三壇ヲ構フ悉螺鈿也阿弥陀ノ三尊ニ天六地藏定朝カ造ル所也鎮守ハ南方ニ日吉ノ社ヲ崇敬シ北方ニ白山権現ヲ勧請ス此外末〔79オ〕本ノ一切経藏内外陣莊嚴数字ノ楼閣註ニ邊アラス清衡在世

三十年ノ間吾朝廷曆園城東大奥福等ノ寺ヨリ震旦ノ天台山ニ至ル迄寺毎二千僧ヲ供養ス入滅ノ年ニ臨ンテ時俄ニ始テ逆善ヲ修ス百ヶ日ニ當ツテ結願ノ時一病ナクシテ合掌シ仏名ヲ唱ヘ眠ルカ如ク眼ヲ閉ツト

毛越寺

堂塔四十余宇禪房五百余宇也

基衡建立ノ先金堂ヲ圓隆寺ト号ス金毘羅メ紫壇赤木等〔79ウ〕ヲ継万宝ヲ尽シ衆色ヲ交ユ本仏ハ丈六ノ薬師同十二神將各雲慶作之仏菩薩ノ像玉ヲ以眼ヲ人ル事此時ヨリ始ルトカヤ講堂常行堂二階ノ惣門鐘樓経蔵等アリ九條ノ関白御自筆ヲ染ラレ額ヲ下サル参儀教長卿堂中ノ色紙形ヲ書セテル此本尊造立ノ間基衡支度ヲ仏師雲慶ニ乞雲慶上中下ノ三品ヲ註シ出ス基衡中品ヲ領取セシメ功ヲ仏師ニ運フ所謂百両鷲ノ羽百尻七間々中巨ノ水豹ノ皮六十余枚安達絹千疋希婦ノ細布二千端信夫毛地摺千端〔80オ〕等也此外山海ノ珍物ヲ副ル也三箇年に功終ルノ程ハ上下向ノ夫課駄山道海道ノ間二片時モ絶ル事ナシ亦別録ト称シテ生美ヲ絹ヲ舟三艘ニ積逆ルノ処ニ仏師扞躍ノ余リ戲論シテ曰喜悅極リ無トイエトモ猶練絹大切也ト云云使者奔帰テ此由ヲ語ル基衡悔驚亦練絹ヲ舟三艘ニ積テ逆リ遣ス此次第 鳥羽禪定法皇ノ叡聞ニ達シ件ノ仏像ヲ拝セシメ給フノ処ニ更ニ比類ナシ仍テ洛外ニ出スヘカラサルノ由 宣下セラレ基衡是ヲ聞テ心神度ヲ失ヒ持仏堂ニ閉籠リ〔80ウ〕七ヶ日水漿ヲ断起請シテ子細ヲ九條ノ関白ニ愁申ノ間殿下天氣ヲ伺ハシメ給ヒ 勅許ヲ蒙リ遂ニ是ヲ安置シ奉ル次ニ吉祥堂ノ本仏ハ洛陽補陀寺ノ本尊觀音ヲ模シ奉リ生身ノ由詫語アリ嚴重ノ靈像タルノ間更ニ丈六ノ觀音ノ像ヲ建立シ其内ニ彼ノ本仏ヲ納メ奉ル也次ニ千手堂木像ノ廿八部衆各金銀ヲ鏤ル也鎮守守は総社金峯山ヲ東西ニ崇奉ル次ニ嘉勝寺是ハ末功ヲ終テサルノ以前ニ基衡死ス仍テ秀衡造リ畢ス四壁并ニ三面ノ扉ニ法華〔81オ〕經二十八品ノ大意ヲ彩シ昼本仏ハ丈六ノ薬師如来次ニ觀自在王院阿弥陀堂ト号ス基衡カ屢阿部ノ宗任カ娘ノ建立也四壁ノ凶絵ハ洛陽ノ靈地名所也仏壇ハ銀也高欄ハ磨金也次ニ小阿弥陀堂同人ノ建立也障子色紙形ハ参議教長卿筆ヲ染ル所也

無量光院

新御堂ト号ス秀衡建立也堂ノ内四壁ノ扉ニ觀経ノ大意ヲ図繪シ〔81ウ〕加之秀衡自ラ狩獵ノ体ヲ図繪ス仏ハ阿弥陀ノ丈六也三重ノ宝塔院内ノ莊嚴悉ク以テ宇治ノ平等院ヲ模スル所也鎮守ハ中央ニ惣社東方ニ日吉白山ノ両社南方ニ祇園ノ杜王子ノ諸社兩方ニ北野ノ天神金峯山北方ニ今熊野稻荷等ノ社也

右ノ堂塔仏閣九十年以前迄ハ在シニ野火ニ焼テ今ハ礎ノミ残レリ中尊寺ハカリ纒ニ残ルトイエトモ経堂ハ形ハカリニテ昔ノ跡トテハ金色堂ノミナリ〔82オ〕

平泉之館

平泉ト号ル事往古平地ヨリ酒泉湧出シヨリ此号アリト謂リ今モ田ノ畔ノ辺ニ少シハカリノ清水アリテ枯柳一本残レリ秀衡ハ無量光院ノ北ニ並ヘテ宿館ヲ構是ヲ平泉ノ館ト云西木戸ニ嫡子国衡カ家アリ同四男隆衡カ家はニ相並フ三郎忠衡カ家ハ泉屋ノ東ニアリ無量光院ノ東門ニ一郭ヲ構ヘ加羅菜ト号シ秀衡カ常ノ居所トス泰衡相統テ此ニ居ス觀自在王院ノ南大門ノ南北ノ路東西數〔82ウ〕十町ニ及ンテ宿ヲ造リ並ヘ倉町モ數十字ノ高屋ヲ建是ヲ号テ高屋ト云同キ院ノ西北ニ數十字ノ車宿アリ

鎮守府將軍清原武則カ子荒川太郎武貞カ継子藤原ノ清衡戰功ニ依テ繼父武貞卒去ノ後奥六郡シ伝領ス所謂伊沢加賀江刺稗枝志波岩手也康保年中江刺ノ郡豊田ノ館ヲ磐井郡平泉ニ移シテ宿館三十三年ヲ経テ率ス陸奥出羽ニテ一萬余ノ村ヲ領ス〔83オ〕基衡ハ景福父ニ超奥羽根兩國ヲ管領スル事又三十三年也復タ亡シテ秀衡父ノ讓ヲ得絶廢タルヲ興シ鎮守府ノ將軍ノ宣旨ヲ蒙リ官祿父祖ニ越榮耀子第二及フ亦三十年ヲ逆テ卒去ス已上三代九十九年ノ間造立スル所ノ堂塔幾千萬宇ト云事ヲ知ラスト云云

衣河之館

安部ノ頼時カ居城也昔日頼時国郡ヲ掠メ領シ此所ヲ点シテ家〔83ウ〕屋ヲ構フ嫡子并殿盲目ニ男厨河ノ次郎貞任三男鳥ノ海ノ三郎宗任四男境ノ講師官照五男黒沢尻ノ五郎正任白鳥ノ八郎行任等也女子八有カ一乃未陪中カ一乃未信一カ一乃未陪也已上八人男女ノ它

簷ヲ並へ郎從等カ屋閣門西ハ白河ノ関ヲ界十余日ノ行程タリ東ハ外ノ濱ニ拠テ亦十余日其中央ニ当ツテ遙ニ関門ヲ開キ号テ衣関ト云宛モ函谷ノ如シ在リハ高山ニ隣リ右ハ長途ヲ顧ル南北ハ同ク峯嶺ヲ連ス産業亦海陸ヲ兼三十余里ノ際桜樹ヲ植並フ四五月ニ至ル〔84才〕マテ残雪消ル事ナシ仍テ駒形ノ嶺ト号ス今ハ長部山ト云リ麓ニ大川アリテ北ヨリ南ニ流ル北加美川是也桜川トモイヘリ衣川モ流レ降ツテ此河ニ通ス凡官照カ小松ノ橋成道カへ貞任後見 琵琶ノ柵等ノ旧跡彼青巖ノ間ニアリ安倍ノ貞任カ一家朝敵ト成ツテ源賴義征伐ノ始天喜五年ヨリ元禄七年迄六百三十八年ニ成

鎮守府

伊沢郡也八幡宮アリ鎮守八幡ト号ス田村磨東夷征伐ノ為奥州〔84ウ〕ニ下向ノ時勸請シ奉ラル、所ノ靈廟也彼郷帶セラる、所ノ弓箭并鞭等宝藏ニ納メ置レテ今ニ在ト云云賴義義家モ此所ニ居住アリト

右鎮守八幡宮ハ延暦二十歳ニ建立ト王代記ニ見エタリ元禄七年迄八百九十四年ニ成

厨川ノ城并鳥ノ海

磐井郡ニアリ則磐井川ノ水上也今ニ其跡残リテ厨川ノ城跡トイエリ是貞任カ籠ル所也東鑑ニ曰文治五年九月十一日賴朝卿陣カ〔85才〕岡ヲ立シメ給テ今日マテ七ヶ日此所ニ逗留シ給者也而ルニ高氷寺ノ鎮守ハ走湯權現ヲ勸請シ奉ル者也其傍ニ亦小社在リテ大道祖ト号ス清衡カ勸請也此社ノ後ニ大キナル槻ノ木アリ賴朝彼ノ樹ノ下ニ莅走湯權現ニ奉ルト称シテ上箭ノ鏑ニツツヲ射立シメ給フ是ヨリ厨川ノ柵ヘハ廿五里ノ〔六丁ヲ以一里トス〕行程タルニ依テ未タ黄昏ナラサルニ厨川ノ館ニ着御シ給ト云云亦鳥ノ海ノ柵ハ巨理郡ナリ城跡今ニアリ仙台ヨリ南ニ相当ル〔85ウ〕

田谷ガ窟

田村麿並ニ利仁等ノ將軍繪命ヲ奉リ東夷ヲ征スル時賊主惡路王并赤頭等塞ヲ構ルノ岩窟也其巖洞ノ前途ハ此ニ至ルマテト余日ニシテ外ノ濱ニ隣ル坂ノ上ノ將軍此窟ノ前ニヲヒテ九間四面ノ精舎ヲ建立シ鞍馬寺ヲ模シテ多門天觀音地藏ヲ安置シ西光寺ト号シ水田ヲ寄附シ給其寄文ニ云ク東ハ北加美川ヲ限り南ハ磐井川ヲ限り西ハ写王ノ岩屋ヲ限り北ハ牛木長峯ヲ限ル者ハ東西三十余里南北二十余里ト〔86才〕云云〔六丁ヲ以一里トス〕以上東鑑

高館

山ノ高サ直立ニシテ五十間麓ヨリ山ノ上マテハ二丁ハカリ東西四百六十六間南北百三十間西ハ北加美川山根ニ添フ流レ衣川南ニ流ル、山ノ上ニ義経ノ靈屋アリ柳ノ御所トモエリ昔ハ北加美川長部山ノ麓ヲ流レシトナリ今ハ高館ノ麓ヲ流ル

泉ガ城〔86ウ〕

平泉ヨリ十八丁余西北ニアリ是則泉ノ三郎忠衡カ居城也此ノ館東西四十八間南北九十六間高サ直立十間アリ〔87才〕